

親の白猫小の白猫ふざけかけあがる老木の幹の梅は
らら散る 『老松』 佐佐木信綱

昭和三十二年、凌寒荘での作。縁側に沿って梅の老木が今もある。猫は近隣に住む谷崎潤一郎家からもらったと由幾先生から伺ったことがある。谷崎は、動物の中では猫が一番美しい、ことにベルシャの白が良いと言っていて、昭和十九年の年譜には「純血の白いベルシャ、イチが来た。皆でお市の方と呼んでいる」との記載がある。凌寒荘の白猫はその血統を引いているにちがいない。谷崎家から、庭伝いの小道を通って貰われてきたのだろう。

水甕を跳びそこなひし小猫なれば睡蓮の花と顔が並ぶも 『傷痕より』 加藤 楸邨

短歌のノート「傷痕より」、昭和五十四年の作品。俳句には「百代の過客しんがり猫の子も」という名句がある。猫と作者がごく自然に寄り添っていて、猫の作品といえど詩歌俳句を通してこれが究極の作品ではないかと思っている。

生みし仔の胎盤を食ひし飼猫がけさは白毛となりて
そよげる 『原牛』 葛原妙子

「胡桃ほどの脳髓をともしまひるまわが白猫に冥想ありき」と共によく知られた一首。脳髓や胎盤という生々しい臓器のイメージと、白猫の涼やかな姿態とが組み合わせられて、猫の本質的な特長がより強く浮かび上がる仕組みになっている。

風の荒だつ土の上にきらめく陽われは猫のしている

短歌の現在

猫の歌15首を読む

斎藤佐知子

ものを見てはいない

『驟雨の中の噴水』 木尾悦子
猫は動くものに反応する。光のきらめきを眼で追っているのだろう。築地正子の「蝶の眼に見えてわが瞳に見えるものこの夜に在りて闇に入る蝶」は、闇のなかにあるはずのものを、木尾悦子は、きらめく陽の光のなかにあるはずのものを、私も見たい、知りたいと思っただけである。好奇心が共通している。

振り向けば窓と格子のあわいにて猫が見ており行き
て頼みす 『坂口弘歌稿』 坂口弘

朝日歌壇の佐佐木幸綱欄に入選した歌。獄舎の独房に拘束されている作者と猫とのつかの間の出会い、独房の窓には冬でもガラスを嵌めないのだそう。猫にとつては人の世の善悪、倫理などは関係の無いはず。作者にとつてこの時、猫がどれほどすばらしい存在であったものか、「行きて頼みす」が端的に伝えている。

おしやべりをするやうに啼く猫だつたときをり妻に
相槌も打ち 『天意』 桑原正紀

脳動脈瘤破裂で倒れた妻に猫の声を聞かせたことが「このこゑが意識なき妻をはげまししことほるかなりそのぬしはなく」という歌となった。前出の坂口弘と猫は一瞬の関わり合いの激しさを歌っていたが、桑原正紀は共に暮らした家族同様の深い感情をテーマとしている。

猫の目にみどりの針が燃えてをり海は見えずして海
にほふ屋 『地に低きもの』 真鍋美恵子